2021年12月19日（日）主日朝礼拝説教

『天地を結ぶクリスマス』井上隆晶牧師
イザヤ60章1～6節、ルカ福音書2章1～20節

❶【神（天使）が近づいて来られる意味】

クリスマスおめでとうございます。イエス様がお生まれになったその夜、羊飼いたちが野宿しながら夜通し羊の群れの番をしていました。すると暗闇に突然、天使が現れ、彼らの周りを照らしました。その時の様子を聖書はこう書いています。
「**主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。『恐れるな。私は、民全体に与えられる大きな喜びを伝える。今日、ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。』**」（ルカ2：9～11）
なぜ、救い主の誕生は神殿で神に仕えていた祭司たちや、身分の高い政治家でもなく、貧しい無名の羊飼いたちに知らされたのでしょう。それは彼らが最も貧しく、身分が低く、恐れの中に生きていたからだと思います。（病人や障碍者の方がもっと厳しい中にいたでしょうが）彼らは生き物を相手にしていますから安息日でも礼拝を守れません。人々から見下げられ、救われない人としてレッテルを貼られていたと思います。彼らは神からとても遠い世界にいた人たちなのです。だからこそ彼らは非常に恐れたのです。でも彼らだけでなく、人はいつも恐れています。いつから人は恐れるようになるのでしょう。自分の犯す罪と関係していることは確かです。それだけでなく、他人からの厳しい言葉や態度で傷つき、社会や親からの教育で恐れを植えつけられ、神と人を恐れるようになります。人間の中には深い恐れがあります。自分は愛されるだろうか、受け入れられるだろうか、赦されるだろうか、食べていけるだろうか、生きれるだろうか、いつもいろんな恐れでいっぱいです。

●11月末に大阪キリスト教連合会の研修会があり、「聖書とコロナウィルス流行」という題で神戸改革派神学校の校長である吉田隆牧師がお話をされました。その中で先生はとても興味深いお話をされました。聖書では「距離が近い状態を幸せと呼んでいる」というのです。創世記で神が人間を創造された時、フーセンに息を入れるように、人の鼻に神は自分の口をぴったり近づけて命の息を吹き入れました。人は一人でいると良くないと言って、男女が創造され、二人は一体でした。ところが人間が罪を犯すと、アダムは神の顔を避け神と距離が生まれます。責任転嫁によって男女の間に距離が生まれ、人は楽園から追放されます。罪人は神殿から遠ざけられ、重い皮膚病になると人や町から遠ざけられ、傷ついた人を見ても、祭司やレビ人は関わろうとしません。今回のコロナ・ウィルス感染症で「ソーシャル・ディスタンスを取るように」と言われ、人は人との距離を取らなければならなくなりました。高齢者や病人は家族からも引き離されて孤立し、面会することもできません。子どもたちはマスクによって保育士の顔を見ることもでき

なくなりました。神や人との距離が生まれると人は幸福を感じないのです。

そんな恐れの中にある羊飼いたちに天使はいいます。「**恐れるな！**」神が人に近づく時、必ずこの言葉をいいます。宗教というのは英語で「レリジョン」といい、「再び結び直す」という意味です。結び直されたら距離は近くなるのです。宗教は人と人を近くするものです。人間が罪を犯すと、神と人の関係、人と人との関係が切れてしまいます。そこでその関係を再び結び合わせるために、犠牲の供え物を捧げました。しかし聖書では、人間の側からではなく、神の側から、神が御自ら手を伸ばして、人間との関係をもう一度結び直そうとされたと書かれています。そのための犠牲の供え物も、人間の側からではなく、神の側からでした。それがイエス様です。神の子自らが犠牲となって、関係を修復しようとしているのです。これは驚くべきことです。悪いのは人間です。神には何の落ち度もありません。しかし人間は恐れによって手を伸ばすことが出来ないので神の方から人間に近づくのです。近づいてくるという事は、「あなたと関係を持ちたい」「あなたと一緒にいたい」という神の心の表れなのです。**神はあなたを嫌っていません。神の方から近づく、これがキリスト教の特徴です。そしてこのクリスマスの時、それが最もはっきりと表れたのです。**私は今までに 40 回クリスマスを迎えましたが、今年になって「**主の天使が近づき**」という意味がようやく分かったのです。

❷【天と地を結ぶ出来事】

クリスマスの夜、一体何が起こったのでしょうか。神は天を傾けて地に降り、マリアの胎内で聖霊の働きによって人と一体になり、クリスマスの夜、この世にお生まれになりました。神が人に近づいたどころではなく、完全に一体となってこの世に生まれたのです。イエスという名はヘブライ語でインマヌエルといい「神は我々と共におられる」という意味です。これこそ受肉の神秘です。その夜、神だけでなく、主の天使たちも羊飼いたちに近づきます。天の者がみな地に近づくのです。地上に天の光が届きます。その光で地上は栄光に照らされます。天使たちの大軍は地上に向かって「**いと高きところには神に栄光あれ、地には平和、御心に適う人にあれ。**」（ルカ 2：14）と讃美を歌い、地にある者たちを祝福します。こうして天と地が一つに結ばれ、神と人が一つに結ばれ、闇と光が一つになるのがクリスマスです。

●4 世紀のローマの聖大レオはこういっています。「尊厳が卑しさをとり、力が弱さを、永遠性が可死性を取るのです。われわれ人類の負債を支払うために、犯しえない神性が、苦しみうる人間性と一致したのです。つまり、真の神、真の人は、唯一の主において一つになったのです。こうして、はじめて、われわれの救いにふさわしいことが行われるようになりました。すなわち、神と人との間の唯一無二の仲介者が、人間であるからこそ死ぬことができ、神であるからこそ復活することができるようになったのです。」

イエス様は活動の第一声で「**神の国は近づいた**」といわれました。天国って私た

ちが頑張って良い子になって上ってゆく所ではないのです。天国は降って来るのです。天国って死んでから行く所ではないのです。既に地上に来ており門は開いているのです。教会、それが天国の入り口です。

❸【賛美しながら帰ろう】

天使は羊飼いたちにいいました。「**今日、ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。**」地上の人は誰も自分たちを相手にしてくれませんでしたが、天の神は自分たちを相手にしてくれました。自分たちは神の側に行くには相応しくないと思っていたけれども、そうではないということです。自分たちは神に認められ、受け入れられている、大切に思われているということが分かったのです。天使は続けてこういいました。「**あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。**」（ルカ 2：12）そこで彼らは「**さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせて下さったその出来事を見ようではないか**」（ルカ 2：15）といって話し合い、出かけて行って飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。そして見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行きました。イエス様が来たからと言って、彼らの生活や貧しさは何も変わりません。彼らは何も変わらない現実の世界の中に喜び、賛美しながら帰って行きました。世界は変わらなかったけれども、彼らの心が変わったからです。こんな自分でも神様に愛されていたのだということを知ったからです。

●先日、大宮保育園の 5 歳児による降誕劇を見てきました。毎年、見ているのですが何か今年は本当に感動し、勇気をもらいました。コロナ前はすべての園児による降誕劇をしていたのですが、コロナになってから人数制限の為に 5 歳児だけになりました。観客の保護者の方も人数制限をされました。それでも子供たちは裸足で元気いっぱいに、大きな声で嬉しそうに劇をするのです。失敗しても友達が励まし助けてくれます。終わってからは「お母さんどこ！」と走ってきて嬉しそうに抱きつきます。あなたもこの子供たちのようにキリストを信頼して抱きついていますか？と問われているようでした。なぜ感動したのか考えました。制限があっても、人数が少なくても、子供たちは喜びを知っています。将来を信じています。楽しんでいます。大人はいつも周りの状況に飲み込まれますが、子供たちは違います。周りがどんなにひどい状況でも喜んでいます。

喜びって、幸せな時よりも不幸の時の方が感じやすいのだと思いました。光の中より、闇の中の方が幸せって感じるのだと思います。幸せな人ってどんな人でしょう。たとえ体が健康で、多くの人に愛されても不平不満を言い、人を信じられず、孤独な人はいます。いくら多くの財産を持っていても、感謝する心、満足する心、喜ぶ心がない人もいます。自分が愛されていることが分からない人は寂しく、不幸です。幸せな人とは自分が愛されていることを知っている人、与えられた恵みが見える人のことだと思います。

●渡辺和子シスターがこんな文章を書いています。「謙虚さとは神のまなざしに映っている自分の姿で生きること、この言葉が、いつも私を戒めてくれます。…劣等感は、実は、傲慢の裏返しなのです。私たち一人ひとりは神の作品なのです。その作品が、自分を〝つまらないもの〟と卑下するということは、作品を侮辱することではないでしょうか。…他人の評価に左右されたり、動揺することなく、神のまなざしに映る自分の姿を高めてゆきたいです。」

神のまなざしには私はどう映っているのでしょう。私たちはいつも自分の思いでいっぱいであり、自分のまなざしでいつも自分を見、「こんな自分は駄目だとか、こんな自分は嫌いだ」とか、思ってしまいます。神の思いをもっと考えたことがあるでしょうか。神の愛をもっと信じたことがあるでしょうか。神の思いの方が大事なのではないのでしょうか。子どもたちは親の愛のまなざしを信じ切っています。子どもに倣いなさいと言われているようです。肩の力を抜いて神の愛の中に飛び込んで良いのではないのでしょうか。どうかこのクリスマスの時、もう一度自分が愛されていることに気がつきますように。あなたのごく近くまで来てくださったキリストの愛が見えるクリスマスになりますように祈ります。